歯学部

Ⅰ　教育の水準　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　教育 20-2

Ⅱ　質の向上度　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　教育 20-4

Ⅰ　教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ　教育活動の状況

〔判定〕　期待される水準にある

〔判断理由〕

観点１－１「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

○　総合的学習と卒前及び卒後臨床実習の連携を図るため歯科医学教育学分野を新設し、アクティブ・ラーナー育成を目指した学習方策の導入、教員のファシリテーション能力の改善、歯科医師等の実務経験を有する教員による診療現場での連携教育に取り組んでいる。

○　アドミッション・ポリシーを定め、WEB 等で一般に公開するとともに、オープンキャンパスにおける模擬授業、サマースクールにおける体験実習、全国の高等学校に教員を派遣する出前講義を実施するなど、受験生の確保に取り組んでいる。

○　PBL（Problem-Based Learning）と TBL（Team-Based Learning）の授業設計に関する教員対象のファカルティ・ディベロップメント（FD）を開催しているほか、学生の授業評価を基に、PBL の実施時期の変更や TBL の演習時間の増加等に取り組むなど、教育プログラムの質保証・質向上のための工夫を行っている。

観点１－２「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

○　基幹教育と連携し、歯科医学研究者、指導的歯科医師となるために必要な生涯学習能力を養成するため、カリキュラムマップに沿って体系的な教育課程を構築し、ルーブリック等を用いて学習目標を明確にしている。

○　医学、歯学、薬学及び保健学に共通する分野について、医療系統合教育科目として「薬害」、「医療倫理」及び「インフォームド・コンセント」を開講するなど、歯科医師としてチーム医療に携わるために必要な能力の涵養を図っている。

○　私費外国人留学生の受入や日本人教員及びネイティブ教員による「歯学英語」の開講により、国際通用性を高める工夫を行っている。また、釜山大学校（韓国）との学生交流やガジャマダ大学（インドネシア）サマースクールへの学生派遣を実施している。

以上の状況等及び歯学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ　教育成果の状況

〔判定〕　期待される水準にある

〔判断理由〕

観点２－１「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

○　第２期中期目標期間（平成 22 年度から平成 27 年度）の共用試験（CBT 及び OSCE）の合格率は、CBT は 96.2％から 100％の間を推移しており、OSCE はすべての年度で 100％となっている。

○　第２期中期目標期間の歯科医師国家試験の合格率は 84.4％となっており、卒業後２年以内におおむね 100％の卒業生が合格している。

観点２－２「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

○　卒業生の多くは特定機能病院の歯科部門や国立大学附属病院等に就職している。また、第２期中期目標期間に博士課程へ進学した卒業生は、査読付き英文誌に 23 件の学術論文を発表している。

○　平成 22 年度から平成 26 年度に実施した、協力型研修機関の指導歯科医による卒後研修期間中の知識と能力、技能と態度の評価結果（５段階評価）の平均値は、すべての項目において４を超えている。

以上の状況等及び歯学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

Ⅱ　質の向上度

１．質の向上度

〔判定〕　質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

○　第１期中期目標期間（平成 16 年度から平成 21 年度）に設置した教育医療情報室を歯科医学教育学分野として改組し、２学年屋根瓦式の統合型教育や課題解決型学習法の導入、学生による授業評価等を行うなど、教育改善に努めている。

○　FD による課題解決型教育に対応した教員育成やカリキュラム開発に取り組むとともに、TBL と PBL を導入している。

分析項目Ⅱ「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

○　平成 26 年度に、５年次に行われる CBT の合格基準を正答率 60%から正答率 70%に引き上げたことにより、平均正答率は平成 25 年度の 73.8%から平成 26 年度の 77.8%となっている。

これらに加え、第１期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。